

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24320076

研究課題名(和文)北西カフカース諸語の類型論的研究

研究課題名(英文)Typological Studies of the North West Caucasian Languages

研究代表者

柳沢 民雄 (Yanagisawa, Tamio)

名古屋大学・国際言語文化研究科・教授

研究者番号：80220185

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,500,000円

研究成果の概要(和文)：北西カフカース諸語の類型論的特徴を音韻、形態論、統語論の中の主要なトピックを中心にし、解明した。アブハズ語については『A Grammar of Abkhaz』で詳細に記述した。さらに『A Dictionary of the Bzyp Dialect of Abkhaz』を作成した。これらと他の北西カフカース諸語を比較して、特に次のことを明らかにした：(1) アブハズ語とウビフ語のアクセント体系には同じ原理が働いている。(2) 北西カフカース諸語の複統合性は、ウビフ語やチェルケス語のほうがアブハズ語よりも衰退しており、これは北西カフカース祖語がアブハズ語型であることを示している。

研究成果の概要(英文)：The aim of the present study is to elucidate the main topics of the typological characteristics of the North West Caucasian languages. On the basis of my “A Grammar of Abkhaz” (Hituzi Syobo Publishing, 2013) and “A Dictionary of the Bzyp Dialect of Abkhaz”, I compare Abkhaz with the other North West Caucasian languages, and I conclude as follows: (1) the accentuation of Abkhaz and Ubykh shows that the accent systems of the two languages can be explained according to the same principle, i.e. ‘the accent law of Spruit’. This indicates that the North West Caucasian proto-language is assumed to have a tonal system; (2) in Ubykh and Circassian the polysynthesism is more declining than in Abkhaz. This indicates that the ergative-absolutive case marking system of Ubykh-Circassian has developed secondarily.

研究分野：言語学

キーワード：北西カフカース諸語 言語類型論 アブハズ語 チェルケス語

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、これまで北西カフカース諸語に属するアプハズ語を科学研究費の助成(平成12年より平成23年まで)を受け、十数年間にわたりフィールド調査してきた。この成果として2010年に *Analytic Dictionary of Abkhaz* (ひつじ書房、xxxvi + 599頁)を科学研究費補助金(研究成果公開促進費)学術図書として出版した。ここには名詞の派生形と、特に動詞の活用形がアクセントとともに詳細に記述、分析されている。またこれと平行して、文法を記述するためにアプハズ語の様々な言語レベルの記述も進めてきた。特にアプハズ語のテキストを分析し、テキストに現れる名詞と動詞の全ての変化形をインフォーマント調査し、データベース化してきた。またアプハズ語の標準語以外に、音体系が複雑なブジュブ方言の動詞構造もデータベース化を行ってきた。

アプハズ語の大きな特徴は子音の多さに比べて母音音素の少なさである。また動詞に多くの接辞が付加され、大きな動詞複合体をつくることである。この複統合語の特徴は、親族関係にある他の北西カフカース諸語(チェルケス語とウビフ語)ももつが、アプハズ語と違って後者の言語には名詞に主体客体関係を表す格の発達が見られることである。このように親族関係にありながら、構造的に異なった統語的な標示方法をもつ北西カフカース諸語を類型論的に比較することによって、言語の伝達方法の変化のメカニズムを明らかにすることができると考えた。

2. 研究の目的

次の2つの研究目的を立てた。

(1)

アプハズ語の民話テキストを分析し、これをデータベース化することによって、北西カフカース諸語の類型論的研究の基盤をつくること。

(2)

北西カフカース諸語の言語特徴をデータベース化し、音韻、形態論、統語論にわたるトピックを中心に言語特徴を解明すること。

音論について:バルト・スラヴ語からロシア語のアクセントの発達(音調アクセントから強弱アクセントへの変化)を参考にして、北西カフカース祖語のアクセントを音調アクセントと見なし、アプハズ語において音調アクセントから強弱アクセントへの変化という仮定を立てた。これをウビフ語のアクセント資料を用いて、アプハズ語と比較することで確かめることを目的とする。

形態論については、今まで纏めたアプハズ語標準語の資料を基にして、ブジュブ方言資料も加えて、共通アプハズ語の動詞複合体を纏める。この共通アプハズ語の動詞複合体とウビフ語とチェルケス語の動詞複合体を比較し、動詞複合体の接頭辞の働きを解明し、北西カフカース諸語の動詞構造を再建する。

統語論については、ウビフ語とチェルケス語の能格(斜格)の機能を解明し、これと能格をもたないアプハズ語とを比較し、格の発達の問題を解明することを目的とする。

3. 研究の方法

音韻論、形態論、統語論の3分野について、年度毎に重点的な研究テーマを設定した。

(1)平成24年度:音韻論の分野では、ウビフ語のアクセントとschwaについてVogt(1963)、Dumézil(1967, 1975)及びMészáros(1934)のウビフ語資料を用いて調査し、これをデータベース化した。チェルケス語は、固定アクセントタイプであるために、アクセント資料としては役に立たない。語の起源についてはShagirov(1977)、Starostin、Nikolayev(1997)の資料を用いて調査した。

形態論の分野では、アプハズ語のブジュブ方言の動詞の形態をBgazhbaの資料を基にして、このテキストに現れる動詞複合体を形態素に分析し、これをデータベース化した。またウビフ語の動詞構造をDumézilの資料によって調査し、これをデータベース化した。チェルケス語については、中東においてインフォーマント調査を行った。統語論の分野では、アプハズ語のブジュブ方言の民話テキストを分析し、動詞複体内に現れる文法マーカーを調査した。ウビフ語とチェルケス語に関しては、能格(斜格)の使用方法を中心に調査した。

(2)平成25年度:音韻論の分野では、Dumézilのテキストを用いてウビフ語のアクセントデータを収集するとともに、チェルケス語のschwaの出没を調査した。形態論の分野では、アプハズ語のブジュブ方言の非終止形の形態を中心に調査し、ここに挿入される接頭辞の働きを調査した。ウビフ語については、Dumézilの資料を用いて動詞複合体の接頭辞の働きを調査し、これをデータベース化した。チェルケス語については、最近の中東における混乱のためにインフォーマント調査を中止せざるをえなかった。これに代えてKumakhov & Vamling(2009)、Yakovlev & Ashkhamaf(1941)によって、チェルケス語の動詞構造を分析した。統語論の分野では、アプハズ語のブジュブ方言の民話テキストを分析した。ウビフ語とチェルケス語に関しては、能格の用法をDumézilのテキストを使って調査した。

(3)平成26年度:音韻論の分野では、アプハズ語とウビフ語のアクセント体系をまとめ、アプハズ語に働いていた「Spruitのアクセント法則」がウビフ語で働いているかを調べた。これを基にして、北西カフカース祖語のアクセント体系を再建した。形態論の分野では、アプハズ語のブジュブ方言の動詞複合体を分析し、これをデータベース化したものを語彙集の形に纏めた。またウビフ語の基本動詞を形態素に分析し、それを語彙集に纏めた。統語論の分野では、能格のない

アブハズ語と能格のあるウビフ語とチェルケス語を比較して、文の伝達方法の違いを調査した。さらに北西カフカース諸語における曲用の発達を歴史的に調査した。

参考文献：

Bgazhba, X. S. (1964) *Bzybskij dialect abkhazskogo jazyka*. Tbilisi.

Dumézil G. (1967) *Documents anatoliens sur les langues et les traditions du Caucase*. V. Paris.

Dumézil G. (1975) *Le verbe Oubykh*. Paris.

Kumakhov, M. & Vamling, K. (2009) *Circassian Clause Structure*. Malmö University.

Mészáros, J. von (1934) *Die Päkhy-Sprache*. Chicago.

Shagirov, A. K. (1977) *Etimologicheskij slovar' adygskix (cherkesskix) jazykov*. Moskva.

Starostin, S. A., Nikolayev, S. L. (1997) *A North Caucasian Etymological Dictionary*. Moscow.

Vogt, H. (1963) *Dictionnaire de la Langue Oubykh*. Oslo.

Yakovlev, N. & Ashkhamaf, D. A. (1941) *Grammatika adygejskogo literaturnogo jazyka*. Moskva-Leningrad.

4. 研究成果

次の2つの研究成果を得た。

(1) アブハズ語の民話テキストを分析し、これをデータベース化した。ここでは、テキストの翻訳だけでなく、逐語訳とそこに現れる語を全て文法的に分析している。これらの成果は下の雑誌論文1、2、3、4に発表した。

(2) 音韻論、形態論、統語論の3分野について、次の研究成果を得ることができた。

音韻論の分野では、アクセントについて次のことが分かった。アブハズ語の標準語とブジュブ方言のアクセント資料から、共通アブハズ語のアクセント体系はほぼ同じアクセント体系であることが分かった。ウビフ語のアクセント資料から、ウビフ語においてもアブハズ語と同じアクセント法則、即ち「Spruitのアクセント法則」が働いていることがわかった。例えば、語根が優性のアクセント特性 D を持つ語：{DD!} アブハズ語 a-psy' 'soul', ウビフ語 a-psá. 他方、語根が劣性のアクセント特性 R を持つ語：{D!R} アブハズ語 á-bla 'eye', ウビフ語 sy'-bla 'my eye' (D! はアクセントをもつ音節を表す)。このことからアブハズ語とウビフ語は北西カフカース祖語のアクセント特性を保持していることが仮定される。このようなアクセント特性をもつ祖語は、音調アクセントをもっていた蓋然性は高いと仮定される。これについては以下の雑誌論文6と、図書 *A Grammar of Abkhaz* (pp. 26-36)に纏められている。また北西カフカース諸語の音韻体系と音対応についても上掲の論文6で触れた。さらに、北西カフカース諸語の音論を研究する過程で、当初研究目的として設定していなかった音

素論についても発見があった。これはロシアの研究者(特に、モスクワ音韻論学派の研究者)の音素の概念が、カフカース諸語の研究者である、ウスラルとヤーコヴレフを通じて発達したことがわかった。これについては下の雑誌論文5で一部触れた。

形態論の分野では、まずアブハズ語のブジュブ方言の語彙集を編纂した(下の雑誌論文7にて発表した)。ここでは例文の語は全て形態素に分析して、示した。特に動詞についてはできる限り多くの例を挙げて、その動詞複合体の様相を呈示した。ブジュブ方言の音と形態の特徴については、下記の図書 *A Grammar of Abkhaz* (pp. 402-420)に 'Features of Bzyp Dialect' として纏めた。アブハズ語の動詞形態論の詳細は上記の文法の pp. 98-260に纏めたが、これとウビフ語とチェルケス語の動詞形態論との比較は下の学会発表「北西カフカース諸語の文構造について：アブハズ語を中心として」のレジュメに発表した。

統語論の分野では、アブハズ語の文構造について *A Grammar of Abkhaz* の pp.261-401に纏めた。ここでは文の語順や自動詞文、他動詞文、倒置構文、などの文を纏めた。アブハズ語とウビフ語とチェルケス語の文構造についての比較は、学会発表「北西カフカース諸語の文構造について：アブハズ語を中心として」のレジュメで触れた。例えば、他動詞文の語順はアブハズ語でもウビフ語でも S-(IO)-O-V であり、ウビフ語の動詞複合体では3人称接頭辞がかなりゼロとなっているが、それを補うかのように名詞に能格(斜格)が発達している。主語と目的語の形態的な標示方法を比較すると、アブハズ語の動詞標示型とその他のウビフ語とチェルケス語の動詞と名詞の両方に格標示をする型が見られる。音的、形態的な情報を勘案すれば、ウビフ語とチェルケス語に見られる能格(及び動詞複合体)による格標示システムは、アブハズ語のような動詞にのみ格機能を集中させる標示システムより新しい、二次的な発達であると見なすことができる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

1. Tamio Yanagisawa, *Abkhaz Text* (11): The Man Who Carried Out Good Deeds For A Dead Man (II). *Studies in Language and Culture*. Graduate School of Languages and Culture, Nagoya University. Vol. 34-1. 125-142. 2012. (査読無)
<http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/jspui/bitstream/2237/17485/1/yanagisawa.pdf>
2. Tamio Yanagisawa, *Abkhaz Text* (12): The Man Who Carried Out Good Deeds For A Dead Man (III). *Studies in Language and Culture*. Graduate School of Languages and

- Culture, Nagoya University. Vol. 34-2. 133-151. 2013. (査読無)
<http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/jspui/bitstream/2237/17922/1/yanagisawa.pdf>
3. Tamio Yanagisawa, Abkhaz Text (13): The Man Who Carried Out Good Deeds For A Dead Man (IV). *Studies in Language and Culture*. Graduate School of Languages and Culture, Nagoya University. Vol. 35-1. 253-268. 2013. (査読無)
<http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/jspui/bitstream/2237/18902/1/yanagisawa.pdf>
4. Tamio Yanagisawa, Abkhaz Text (14): Which One Among Us Does She Belong To?. *Studies in Language and Culture*. Graduate School of Languages and Culture, Nagoya University. Vol. 35-2. 109-127. 2014. (査読無)
<http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/jspui/bitstream/2237/19710/1/yanagisawa.pdf>
5. 柳沢民雄「N.F.ヤークブレフ：音韻論、カフカース学、ロシア語学(1)」言語文化論集 36 巻 1 号、169-178. 2014. (査読無)
<http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/jspui/bitstream/2237/20893/1/yanagisawa.pdf>
6. 柳沢民雄「北西カフカース諸語の類型的特徴：アクセントの比較研究」北西カフカース諸語の類型論的研究(平成 24～平成 26 年度科学研究費(基盤研究 B)成果報告書) 1-30、2015.
7. Tamio Yanagisawa, A Dictionary of the Bzyp Dialect of Abkhaz. 北西カフカース諸語の類型論的研究(平成 24～平成 26 年度科学研究費(基盤研究 B)成果報告書) 82-174、2015.

〔学会発表〕(計 1 件)

柳沢民雄「北西カフカース諸語の文構造について：アプハズ語を中心として」類型学研究会 2015 年 1 月 24 日、専修大学(東京都)

〔図書〕(計 1 件)

Tamio Yanagisawa, *A Grammar of Abkhaz*. ひつじ書房、xiv + 547. 2013. 科学研究費補助金(研究成果公開促進費)学術図書、課題番号 245071

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 出願年月日：
 国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 出願年月日：
 取得年月日：
 国内外の別：

〔その他〕
 ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柳沢民雄 (Yanagisawa Tamio)
 名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・教授
 研究者番号：80220185

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：